桂川・相模川流域協議会会報誌

あじぇんだ

2016.3
第36号

第21回 流域シンポジウム
第8回流域ウォーキング（四方津～猿橋）
僕らは水ガキだった
流域紀行「ざまみず」と「さかさがわ」
相模川の高瀬舟

「あじぇんだ113」は、行動計画・指針を意味する単語 agenda に山中湖から相模湾までの主流路113キロの数字を組み合わせたものです。

第21回 流域シンポジウム報告

桂川から相模川へ　清く豊かに川は流れる
～森は海の恋人～

■日時：2015年12月6日(日)　■主催：桂川・相模川流域協議会
■場所：大月市民会館大ホール　■共催：大月市

報告者●清水 絹代／桂川・東部地域協議会

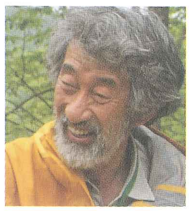
年末にも関わらず200名以上の参加者を迎え「第一部・基調講演」「第2部・分科会」「大月市伝統芸能アトラクション」の構成で実施しました。「森は海の恋人」の理念で植林活動をされている畠山重篤氏の魅力に惹かれ参加された方も多くいました。第2部分科会は「若者の活動報告」「両県の環境税の説明」「地域協議会の活動報告」の興味深い沢山の報告で特に環境税への関心が高く、会場に入れない状況でした。また薪と民族楽器奏者と地元大月の伝統芸能「笹子追分人形」とのコラボでの幻想的なアトラクションや事業者部会や関連団体など14団体が参加したロビー展示・交流などで賑わい花を添えました。

基調講演の「森は海の恋人」の活動理念は水循環基本法を軸とした「つなげよう、支えよう森里川海プロジェクト」の国の取り組み、桂川・相模川流域協議会のこれまでの取り組みとも重なり、今後の流域の水循環保全活動における「海を含めた上下流域の協働」の重要性を改めて共有できたと確信しています。

第一部 基調講演

講師：畠山重篤先生

南三陸牡蠣養殖業
京都大学教授
植林活動NPO法人「森は海の恋人」



「森を守ることが、豊かな恵みをもたらす海を守る」の理念での実践事例・活動の課題等を解りやすく話されました。森を守る実践活動が、日本大震災の津波で大打撃を受けた牡蠣養殖を見事に蘇らせた実績は、正に国が掲げた「つなごう、支えよう森里川海」していると感じました。

また、小中学校・高校・大学等、教育機関への環境教育に尽力されているお話しの中で、「川は危険・子どもを遊ばせてはいけない」の意識が教育機関に広がり、子どもも大人も、自然との距離が遠くなる危険性を語られ、活動していく上に大きな壁となることが危惧されます。

実践活動から得た氏の言葉「人の心に木を植える」はあらゆることに当てはまる、ステキな言葉でした。

第二部
分科会

●第１分科会
次世代につなぐ若者達の活動

●大月市立大月短期大学・大月森づくり会：宮本秀一
・地域実習の授業の一環で大月森づくり会の活動に参加の報告。
●都留文科大学・サークル「和み菜家」：阿部祥子・菊池香帆
・富士山の恵みの湧水を活用した、季節限定の貴重な特産物「水掛け菜」栽培のサークル報告。
●神奈川県立横浜清陵総合高等学校：岸本和純
・相模川での遊びを通しての実体験から得た学び・気付きの報告
●麻布大学・フォレストノバ：釜谷優太
・麻布大学他数大学で構成する学生団体の「森を知る」「森をつくる」「森をつなぐ」の実践活動報告。

●第２分科会
つなげよう　支えよう　私たちの税金の使い道を知ろう

●神奈川県環境農政局水・緑部、山梨県森林環境部職員
・神奈川県「水源環境保全税」と山梨県「森林環境税」の使い道・取組んでいる事業の報告。
●国の取り組み：環境省審議官中井徳太郎
・「つなげよう、支えよう森里川海プロジェクト」構想について説明。

●第３分科会
流域での交流・ふれあい　事例から新たな活動

●山梨探偵団：石井慶一郎（源流地域協議会）
・源流域の富士山麓の自然に触れ、観察することを通してその豊かさの再発見等の体験活動報告。
●忍野ユネスコ協会：長田五月（源流地域協議会）
・「桂川・相模川クリーンキャンペーン」事業者・市民・行政との協働への取り組み」の報告。
●カワラノギクを訪ねてカヌーの旅：岡田一慶（さがみ地域協議会）
・自然の玉石河原の減少による絶滅危惧種「カワラノギク」の現状報告と保護活動の実践報告。
●馬入水辺の楽校の会：臼井勝之
・子ども達の声が聞こえない実態への危惧から、子ども達の自然環境活動への参加・協力呼びかけ。
●水ガキ養成講座：中門吉松（湘南地域協議会）
・子どもが川で遊ぶ事が無くなっている現状から子どもが川で遊ぶ体験講座実施の報告。

ロビー展示

アトラクション

＊まとめ
「命の根源である水を守る」を自分の事として意識し、行動するためにより多くの人に発信することが流域協議会の重要な役割であることを改めて感じた。国の水循環基本法への取り組は、国民の命を守る重要な政策で有り、成果有る取り組みを期待したい。参加者のアンケートには基調講演・分科会から、様々な気付き・学びそして新たな行動へのきっかけになった等多くの声があった。国の政策に先行している流域協議会の取り組みは、地域の抱える課題・活動の現状を国と共有し、「森里川海プロジェクト」と連動し、次世代につなげる実践活動に広げることが重要である。

桂川・相模川流域ウォーキング

第８回桂川流域を歩く（上野原市四方津～大月市猿橋）

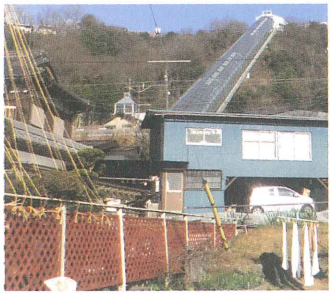
報告者●中門 吉松

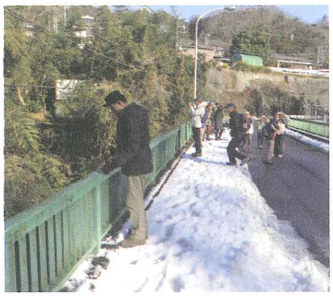
四方津から桂川沿いの樹林に囲まれた深い渓谷美・沢から流れ込む清らかな水、渓谷の上に開けた段丘上の里地・里山を見ながら歩く。この地の「四方津層」は丹沢山地北部に分布する新第三系と呼ばれ、火山噴火岩・火山砕層岩を主体として舟久保付近で北東-南西方向の褶曲軸を有する褶曲構造をなしている。（丹沢山地東部の地質より）

桂川流域の中で松留から塩瀬の間は最も渓谷が深く容易に全容を見ることはできない。渓谷に架かる川合橋・塩瀬橋・猿橋の上から岩肌を流れる桂川の渓谷美を堪能した。

❶ JR四方津駅を起点に桂川の渓谷、段丘上の里道を歩く。

JR四方津駅から国道20号線を越えて山の頂上に向けて「コモア・ブリッジ」と呼ばれる巨大なガラスに包まれたドームが参加者の目を引いた。高柄山方面の道標を目印に里道を下ると桂川に架かる吊り橋が見えてくる。川合橋から眺める桂川の渓谷は絶景だった。


コモア・ブリッジ


川合橋

対岸には桂川流域下水道川合中継ポンプ場があり、上流の桂川清流センターに送られる。

四方津渓谷

川合ポンプ場

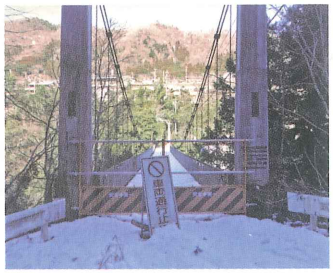
❷ 大月市梁川町塩瀬地区を歩く

塩瀬地区は桂川右岸の傾斜地を整地された里地で見晴らしの良い景観が続いている。

くねくねと続く里道の横は、桂川から運ばれたものと思われる丸石で積まれた石垣が傾斜地を保護し、建っている屋敷は二階が低く養蚕農家だった名残を伺わせている。

深い谷に架かる橋の上から眺めると沢の水が小さな滝を為し滝壺にも清水を湛え桂川に流れ込んでいる。桂川に架かる吊り橋の旧塩瀬橋は車両通行止めで封鎖されていたが、たもとにある道祖神にはペットボトルが供えら住民の温かさを感じた。

川合里道


塩瀬橋

❸ 桂川渓流釣り場見学

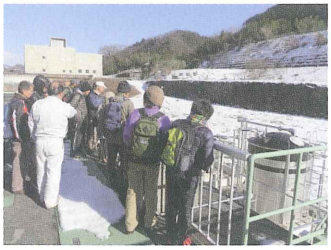
桂川清流センター上流の坂道を下ると桂川渓流釣り場に着く。季節外れで閑散としているが、桂川漁協が管理している小屋横には沢から引かれた清水が流れ、露出した岩肌に立って眺める桂川の水はどこまでも清らかだった。

渓流釣り場

渓流釣り場

❹ 桂川清流センター見学

桂川清流センターは桂川流域（富士吉田市の一部、西桂町、都留市、大月市、上野原市）の汚水を一括処理する終末処理場として、平成16年4月に供用開始され、平成26年度末現在の処理能力は15,000m3/日（下水道普及理率29.8%、流入下水量約6,000 m3）となっている。集中監視室、水質試験室、沈澱池、山梨県・神奈川県共同事業としてリン除去を目的として設置した凝集剤添加設備（平成26年度供用開始）を見学した。


桂川清流センター

桂川清流センター

❺ 日本三奇橋・猿橋、国重要文化財・八ツ沢発電所第1水路橋見学

現在の猿橋は昭和59年8月、32年ぶりに架け替えられたもので、嘉永4年（1851）の姿が復元されている。はね木（木組）を両岸から迫り出して造られた橋は桂川の渓谷美と調和して国指定の名称となっている。下流に架かる東京電力八ツ沢発電所・第1号水路橋は大正3年に完成した施設の一つで国の重要文化財指定されている。水が水路橋を渡り、同じく国重要文化財の第3号隧道へ流れる。

猿橋

第1号水路橋

❻ 宮谷地区の第2号開渠（かいきょ）、桂川の富士講精進場跡を見学

約700m下流の「宮谷入口」を桂川に向かうと金網で覆われた第2号開渠水路がある。民家の間を下ると「桂川石仏群」があり、その中に富士講碑が2基みられる。この辺りは旧甲州街道であり富士講の精進場跡、白装束に身を包んだ道者達が富士山から流れる桂川の神聖な水で身を清めたという。

宮谷地区の水路

富士講精進場

【参加者の感想】

当日はところどころ雪が残っていたが好天に恵まれ、桂川に寄り添うように点在する集落に里山を感じ、山間を流れる沢の状況、桂川の渓谷美など自然環境の豊かさを体験できた。

「桂川清流センター」では下水処理の仕組みや水質管理、処理工程などの見学もさせていただきました。当センター若月様の丁寧な説明で処理された水は桂川へ放流していること。放流する前の消毒処理には塩素を使わず、紫外線で滅菌することで、川の生き物の環境保全を考慮していること。沈殿した汚泥はコンクリートの原料としてリサイクルしていること等、私たちの飲料水に関わる情報なので大変勉強になりました。

顧みて　私たちが排出している汚水は、相模湾の水質に影響する事を考えた時に、排出ルールを守ることが大切だと実感させられた一日でした。

●鈴木 茂／相模原市（市民会員）

“水ガキ養成講座 in 神川橋下流”

●岡田 一慶／桂川・相模川さがみ地域協議会 会長

1．日　時：平成 27 年 8 月 22 日（土）10:00～15:00
2．場　所：相模川神川橋下流の河原
3．主　催：桂川・相模川さがみ地域協議会、馬入水辺の楽校の会
4．協　力：相模川湘南地域協議会、相模川キャンプインシンポジウム、神奈川ウォーターネットワーク、神奈川県内水面試験場
5．参加者：さがみ地域協議会公募 60名（大人25名、子供35名）、馬入水辺の楽校の会14名（大人7名、子供7名）合計74名、スタッフ（24 名）参加者合計 98 名

郷里の家の裏側には畑があり、その脇に川幅 10 m 程の宇田川が流れていた。小魚、フナ、コイ、ウナギ、ドジョウ、ザリガニがいて、小学校から帰ると手網と魚籠を持って川に入り大きなウナギを捕まえた。５、６年生の頃には、夏に清滝川や嵐山にでかけてアユをヤスで突いて遊んだ。川や池で遊ぶ技術は年上の近所のお兄ちゃんを見て自然と身に付いた。清滝川は透明で水が冷たく気持ちがよかった。もう 50 年以上も前の話だ。しかし、アユを突いたときの命の振動というべき感触は今でも残っている。気分は今も水ガキだ。

2014 年の流域シンポジウムで相模川の生物多様性を保護するためには、相模川で遊ぶことで相模川に親しみ、その自然を深く知り、相模川の生態系を大切にする文化を醸成することが必要であることを確認した。

それを実現する試みとして、湘南地域協議会、水辺の楽校、さがみ地域協議会は子供達が相模川で

ぼく
水ガキ

魚取りや生物観察を通して楽しみながら相模川の自然を学び、川を大切にする文化を育む［水ガキ養成講座」を８月 22 日に寒川町神川橋下流で開催した。

開催場所には稚魚のゆりかごになっているワンドがある。手網で水生生物を捕まえ、生物観察を体験するうってつけのロケーションである。カヌー試乗体験も企画した。穏やかでゆるやかな流れは初心者やこどもでも安全にカヌーができる。

当日までの準備は様々である。参加者の募集は相模原、大和、湘南地域の６社のタウン情報誌に「水ガキ養成講座」参加者募集の記事の掲載を要請した。その内３社が掲載し、参加者はすぐに締め切りになった。参加申し込みはメールによる申し込みがほとんどで、対応は非常にスムーズに行えた。ただ、さがみ地域協議会の募集人数は 50 人で，すぐに定員いっぱいになり募集を閉め切らなければならなかった。

生物観察の講師は神奈川県内水面試験場職員の二宮さん、ウオーターネットワークの諏訪部さん、会員の小林さんにお願いした。非常に心強い講師陣だ。カヌーの見守りはスタッフが全員で担当した。

カヌーは岡田が６艇、水辺の楽校が１艇用意した。参加者がカヌー持ち込みで参加された方もいた。ライフジャケットは参加者全員分を水辺の楽校が準備した。その他、保険、手網、水中メガネ、救急用品、野外トイレ等が必要だった。当日は快晴でこの企画が成功することを確信した。

カヌーと生物観察の２班に分かれて水ガキ講座は始まった。カヌーでは参加者に簡単な操作を伝えた後、試乗を行った。カヌーは子供でも漕ぐことができるので、すぐにコツを掴んで楽しそうに遊んでいる。親子で２人艇を操る姿は微笑ましい光景だった。

生物観察はたくさんの生き物が見つかった。透明な容器に入れてみんなで名前や生態を確認した。参加者からは楽しい川遊びや安全対策に賛辞の声を頂いたことは素直に喜びたい。

【参加者の感想】

・こんなに素晴らしいイベントをありがとうございます。是非会費を増額して今後も継続して下さい。

・本当にボランティアですか？ボランティアでこんなに素晴らしいイベントを開けるとは驚きました。

・相模川にこんなに良い場所があったことは知りませんでした。もっと情報を発信して下さい。

・安全管理が行き届いており、安心して遊ばせることができました。

＊暑い陽射しにも関わらず熱中症も無く安全に実施され、相模川に親しむ「多くの水ガキ（＋親）予備軍」が養成され、童心に戻り共に楽しんだ一日でした。

らは
だった

型や瓦、古墳、縄文遺跡などの出土品も展示されている。二階は湿田用の田下駄など、民具の展示。館案内の方の解説、旧石器時代より現代に至る、穀倉地帯と交通の要衝を兼ね備えたこの地の歴史に聞き入った。

相模国分寺と相模国分尼寺は、仏教による国の安寧を願った聖武天皇が、741年、国ごとにつくらせた国家寺院のひとつ。台地を背に、相模川の後背湿地に開かれた湿田地帯を眼下に望む地に建てられた。芝生広場に往時をしのぶ塔基壇などが復原されている。逆川（さかさがわ）は、国分寺建立と灌漑の目的で造られた幅5mもの深い水路。台地向こうの目久尻川上流から取水、台地を迂回し、国分寺と国分尼寺の間を上流にむかって流れ、この名がついた。昭和15年に相模川左岸用水が通るまで使われた。ミシマサイコの黄色い花が一面に咲いていたのは、江戸時代の頃。種を譲り受け、遺跡の近くで育てているとのこと。いにしえのお話に頭がいっぱい、お腹はからっぽ。近くで、とびきりのそばを一気にすすりこんだ。

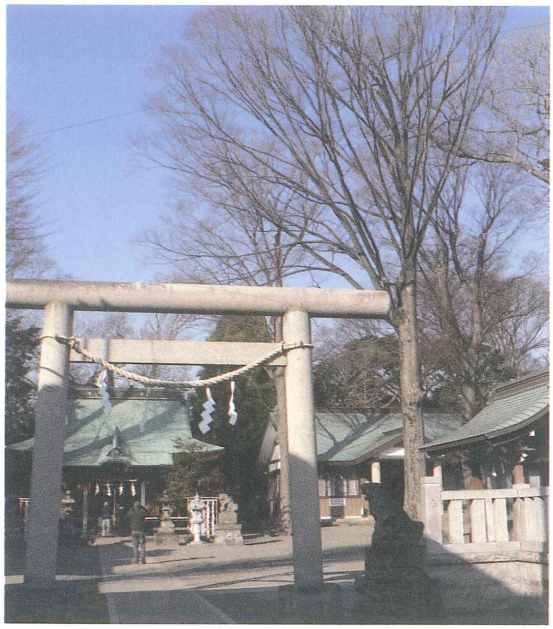
相模川と鳩川の合流地、有鹿（あるか）神社に参拝。水神信仰は、縄文の頃より有鹿の泉に始まり、海老名耕地に農耕の安全と豊穣の祈りは続く。海老名耕地は水田とハウスが混在し、イチゴののぼりがはためく。寒中の乾いたのどに、イチゴの甘酸っぱさがしみた。

縄文遺跡などの出土品

民具

温故館一階

塔基壇


有鹿神社

流域紀行

「ざまみず」と「さかさがわ」

座間市水道の水源と海老名市史跡相模国分寺跡、有鹿神社をたずねて

●大木 悦子／市民部会

訪問地、座間の水道水はおいしいと定評がある。テロ防止の為、水道施設を見学できないことがわかり、座間市水道経済課を訪ねると、水道関連のパンフレットが並び、地下水100％のアルミ缶入りミネラルウォーター「ざまみず」が目をひく。水源地3箇所で地下水をくみ上げ、配水場で県水を加え、消毒等の後、全戸に送られる。昭和54年から県水が入り、宮ケ瀬ダムができて協定を結び、現在は15％が県水、85％が地下水とのこと。

ミネラルウォーター「ざまみず」

芹沢公園の一画に、かつての栗原水源が見学用施設に改修されて残っていると聞いて、公園内を散策しつつたどる。公園の6割が整備され、広場に集う人々の姿も見られるが、広大な樹林は水源の森の風情を保って、すがすがしい。太平洋戦争中に軍の水道施設として造られた栗原水源ポンプ所は、座間市に移管され、取水量の低下により昭和58年に取水停止。公園から湧く水は、芹沢川の水面をゆらす。座間のホタルを守る会による環境保全もみられる。

芹沢公園

栗原水源ポンプ所

芹沢川

目久尻川に沿ってくだり、海老名市の史跡国分寺跡を目ざす。途中、「この辺りに、逆川があったはず」「一面に咲いていた黄色い花を探し歩いた」とつぶやく声。その答えは、遺跡向かいの温故館でみつかった。一階は国分寺の1／100復元模

相模川の高瀬舟――前編

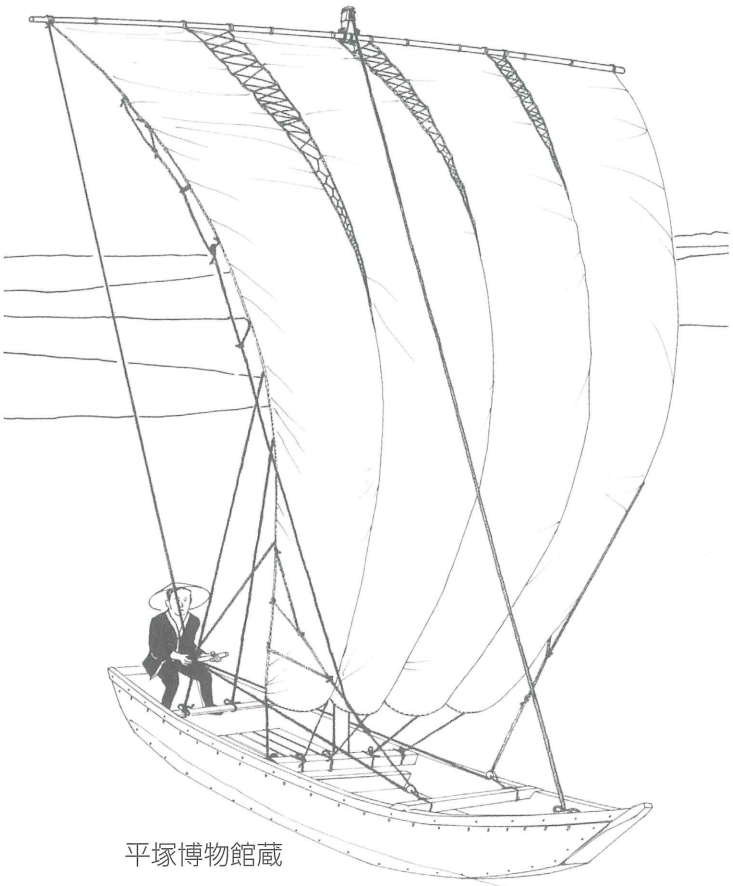
川の記憶を訪ねて（12）

●小島 瓔禮／愛川町在住　琉球大学名誉教授

高瀬舟というと、森鴎外の短編小説「高瀬舟」（『中央公論』大正五年一月）を連想する人が多いのであろう。作品と同時に発表した解題にもあるとおり、ここ京都の高瀬舟は、水運業者であった角倉了以（すみのくらりょうい）が慶長一六年（一六一一）に開削を始めた、町を南北に流れる小運河に就航していた。そこを高瀬川と呼ぶのは、この川舟の名称に由来する。この地の高瀬舟は小舟で、人が川岸を歩いて舟につけた綱を引く、曳き舟であるところに特色があった。

平塚博物館蔵

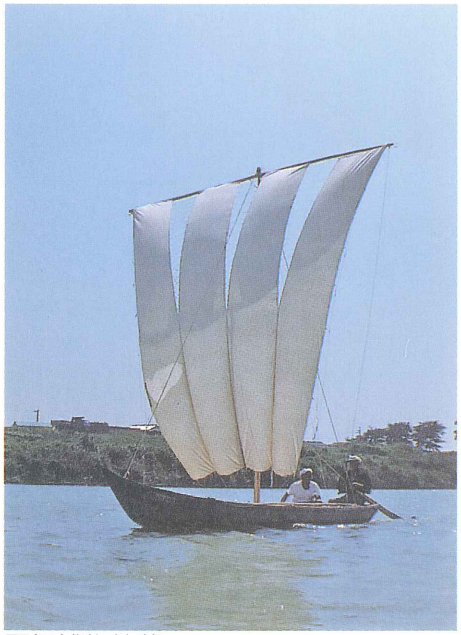
同じ高瀬舟とはいっても、地方により形に差はあるが、名称が一つであるのは、なにか川舟として共通した歴史があるからであろう。相模川でも、かつての舟運の時代を代表するのは高瀬舟であった。ここのタカセについては、葉山町の伊藤最子さんの昭和十四年の聞き書きがある。大船で東京から仕入れて来た品物を、相模川河口の須賀から厚木に運ぶには、主にタカセを用いた。南風があれば帆を掛けて走るが、ないときは、舟が川岸に寄らないように一人が棹をついてかじを取り、一人が爪先だけの草履をはいて舟の綱を引いて川を上った。ここも帆船であると同時に、曳き舟であった。



平塚博物館蔵

平塚市博物館の開館記念特別展の図録『相模川の舟と漁』（一九七六年三月）には、相模川のさまざまな舟が紹介されているが、表紙・扉・部分名称と、その代表はやはり高瀬舟である。上流の上野原、与瀬、中野、小倉、田名あたりから須賀まで、二～四人で炭・薪・米・反物・石を積んできた。帰りは南風を利用して帆をつけて上る。半日ほどで小倉まで上るが、風がないとアサの曳き綱で二～四人で引きあげたので二日はかかったという。

ここの高瀬舟は、長さが十二mほどの木造船で、底板は川底の石があたっても割れにくいように、幅のせまい板をつなぎ合わせた。帆は写真などで見ると、三枚、四枚、五枚とあり、扇形に広げて風をうける。（次号へ続く）



平塚博物館蔵

水はどこから……？

●鈴木 千春／あらいそ ECO クラブ

私の実家は横須賀市・浦賀。ポンポン船と呼ばれる浦賀水道の渡船乗り場や久里浜港にも散歩に行けるような海の近くに住んでいました。久里浜港にそそぐ川があって平作川といいます。実家にいるとき、私は平作川から取水した水を毎日使っているのだと何げなく思っていました。きっと小学校の時に習ったのかもしれませんが、あまり記憶に残らなかったのでしょうか。横須賀市は酒匂川で取水され伊勢原浄水場から送られている水を受水していることを、流域協議会に入ってから知りました。横須賀市には大きな川がないため昔から水が不足することが多かったそうですが、そんな遠方から水が送られているとは驚きでした。洪水があって護岸工事がされている平作川は、川沿いにボートが停泊し、きれいな川とは呼べないものでしたが、鯉は泳いでいました。「蛇口をひねると水が出る」ことは当たり前の世の中ですが、どうしたら子どもに「この水はどこから来ているのか」を想像してもらうことができるのでしょうか。それは伝え続けることでしかないのかもしれません。それには親である自分が想像できないと伝えられないことでもあります。

野球をする息子に付き添い、週末には相模川沿いにいることが多くあります。そこではバッタやカエル、コオロギなどとはしゃぐ子どもの姿を見ることができます。はたまた強風や小さい虫が飛んできて目をあけられないことがあるなど、自然と対峙することもしばしば。雨が降れば水たまりになり、雨が上がると乾いていく。太陽が東からのぼって西にしずむ、など当たり前の光景が都会では違うようです。東京の千代田区長がおっしゃった「子どもたちが体を動かして遊ぶことのできる場所を確保したい。ビルに囲まれ、空は四角いと思わないように。」という言葉は衝撃でした。

野球の練習中、虹がでた空を見上げる息子に「野球に集中して・・・」と願うと同時に、自然を感じて育って欲しいとも改めて思いました。小学校の授業参観は国語の授業で、内容は「俳句・短歌」でした。お題は「冬」。息子が手をあげて読んだ一句は「冬の空／見上げてみると／雪ちらり」でした。雪が降ったら土にしみこんで、その水を草や木の根が吸い上げたり川になって海に行き、蒸発して雨や雪になるんだよって、伝え続けていかなくてはいけませんね。

シンポジウムの前に、バスで立ち寄った猿橋と桂川を見ることができました。とてもきれいな流れで、「これが相模川になる」と思いを馳せました。いつまでもこの光景を残したい。自然を生かしたものを考え、選択できる大人になりたいものです。

河川敷や丘陵に見られる植物

●長岡 恂／厚木植物会 会長

カワラヨモギ（キク科）

河川敷に生育する特徴的な姿をしている。タンボの畦や道端に生えている普通のヨモギは草餅の素材としておなじみだが、このヨモギ、香りは草餅のあの香りだが姿は大きく違う。厳しい河川敷での生活に適応するように長い進化の過程で姿を変えたようだ。

河川敷は大雨や台風でしばしば増水し氾濫する。根茎が発達し、葉が針のように細くなり濁流に流されないように発達したものと思われる。近年はダムが整備され大雨でも氾濫は皆無となり河川敷は里山景観となってしまった。長い年月をかけて変身したカワラヨモギ、戸惑っているかも。

イボタノキ（モクセイ科）

丘陵や山地、原野に自生する。と図鑑やガイドブックに記載されているが、河川敷にも多い。中流域河川敷はもう原野や山地と同じような環境になってしまったのか…　花は白く5～6月ごろ下向きにつき総状花序。

虫が好きそうな特有な香りがする。果実は核果で黒紫色に熟す。樹皮や枝につくカイガラムシの一種イボタロウムシの幼虫の♂がつくる蝋は“イボタ蝋”と呼ばれ、高級ロウとして家具の艶出しなどに使われている。また、植木屋さんはライラックを接ぎ木する際の台木として使っているようだ。

イボタノキの果実

タコノアシ（タコノアシ科）

タコノアシ／夏

奇妙な名前で奇妙な形の花をつける。花序の枝に一列に多数の花が並んでいる様子が、「吸盤の付いた蛸の足」のように見える。秋になると真っ赤に紅葉するので、まさに「ゆでだこ」となり一度見ると絶対忘れない植物だ。

河川中流域や河口域の湿地に生育するが、継続して同じ地域を嫌い、氾濫するかく乱地域を好むようだ。このような性質のためビオトープなどでの長期栽培は難しい。環境省や多くの県でもRDに指定されているが神奈川県では健在種としている。

タコノアシ／秋

しかし、相模川では観察できる場所が減少している気もする。かつてユキノシタ科だったがAPG分類体系で独立のタコノアシ科となった。

タコノアシ／冬

ヒゲナガカワトビケラ

●守屋 博／相模原市立博物館 学芸員

○ 桂川・相模川の優占種

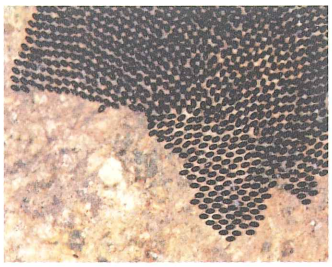
ヒゲナガカワトビケラは、桂川・相模川水系では上流から下流まで広く分布している、トビケラの中でも優占種の一種です。本水系には、ヒゲナガカワトビケラとチャバネヒゲナガカワトビケラの２種類が記録されていますが、後種は河川上流域や本流の一部など、比較的限られた場所で記録されています。

幼虫は別名クロカワムシとも呼ばれ、釣の餌としても利用されています。幼虫は流水中や淀みなどの石と石の間に、自ら吐き出す糸でクモの巣状の網を張り、その網にかかった藻類や有機物を食べ、水質浄化にも一役買っています。

蛹になるときには、小さな石をつなぎ合わせて蛹室を作ります。不思議なことに、蛹室を脱出し羽化する時のために、この時だけ牙のような器官が存在しています。羽化するときには蛹の状態のまま蛹室を噛み破り、水面に浮き上がった時点で背中が割れ飛び立っていきます。

春の陽気が暖かい年には、３月上旬ころから羽化が見られ、春の終わりから夏が最も多くなり、秋まで羽化を観察することができます。羽化が集中する季節には、羽化殻が水面を漂い、突き出した石と石の間や岸辺に、おびただしい数が集まっている光景を目にすることもあります。

成虫の期間は決して長くありません。羽化した成虫は交尾し、メスは産卵のため上流方向に向かい遡上飛行し、川の中に潜り、少し大きめの石の表面に規則正しく産卵します。


卵

幼虫

蛹室内側

蛹

成虫

○ 珍味「ザザムシ」

長野県伊奈地方では、「ザザムシ」という珍味が売られています。冬の時期ヒゲナガカワトビケラを中心とした水生昆虫を捕獲する漁が、諏訪湖から流れ出す天竜川で解禁され、捕獲された虫は佃煮として、缶詰や瓶詰、量り売りなどにより販売されます。以前はカワゲラやヘビトンボなども多く入っていたそうですが、現在はヒゲナガカワトビケラがほとんどだそうです。

人間生活の影響により汚濁する水、水質浄化の一役を担うヒゲナガカワトビケラ、珍味「ザザムシ」を食べる人間。何か不思議な循環を感じます。

きれいな水は上流から

●山口 金吾／九拾参歳 道志村竹之本
●勝俣 藤久／桂川・東部地域協議会会長

山口 金吾

我が道志村は、４千年前縄文時代に原住民が畑を耕作し始めた遺蹟が数ヶ所有り、又縄文の女神を思わせる土器が、神地部落の横浜市水道局水源管理所、池の原部落の民家大屋にあり、又谷村城主秋元但馬の守に年貢大豆７斗７升５合献上した古文書もあります。

道志村は、東西七里という細長い村で、支流数本集まって道志川となります。此の川の水質は、かつて世界の船乗りたちに「赤道を超えても腐らない水」と賞賛された良質な水です。横浜市の水道は、イギリス人ヘンリー・スペンサー・パーマー技師の設計により、明治 20 年に給水を開始しました。

その後、人口の増加などによる水量不足の実情から給水量の増加が緊要となり、明治 28 年に相模川筋津久井郡三井村にあった取水口を道志川筋津久井郡青山村小瀬戸に移転する取入所変更工事に着手し、明治 30 年に青山取入所が完成し、道志川の取水を始めました。

現在、毎秒２トン取水し、横浜市民 372 万人の生活用水の一部となっております。尚、横浜市は道志村と基金を積み、その運用益で道志村の各種事業への助成を行っております。又「はまっ子どうし The　Water」は、横浜市の水源「道志川」に注ぐ清流水で、豊かな自然の恵みを詰めた水です。売り上げの一部はボランティアによる水源林保全活動やアフリカの支援に寄付されております。

我が故郷は日本一の、名水生誕の地であります。

勝俣 藤久

私は山梨県都留市四日市場に生まれ、昭和20年10月より道志村で、１桶 20 円で自動三輪車に 25 桶２段に積んで、砂利道の峠を越えて屎尿処理に貢献してきました。

現在では市町村設置型浄化槽を全家庭に村が設置して「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」又浄化槽法に則り、浄化槽の維持管理と１年に１回以上の清掃を行い、放流される水は透視度１mにも及び、BOD も驚く程の数値を示しております。山梨県浄化槽協会の７条検査、11 条検査の受検も山梨県１位であります。

これからは、県と業界と一体となってきれいな水を送ります。

豊かな水を育む100年の森

道志水源林保全の取組み

●温井 浩徳／横浜市水道局水源林管理所長

道志水源林

横浜市では、水源の一つである道志川の水源水質を守る目的で、大正5年に山梨県から2,780ヘクタールの恩賜県有林を購入し、「道志水源林」として森林の保護・育成を進めています。現在では、取得した森林の面積は2,873ヘクタールであり、道志村の総面積の約36%にあたります。

森林は、水源涵養、生物多様性保全など、私たちの生活を支えてくれる様々な機能を持っていますが、その機能を高度に発揮するためには、土壌の保全が重要です。生物の食物連鎖においても、木や草などの植物の役割は非常に大きく、多様な生態系の土台として森林の土壌は大切です。針葉樹林のように単一相の森林は、手入れが不足すると、陽の光や雨水が行き届かず土壌が悪くなりますが、色々な樹種が混生する森林は、落ち葉などが堆積した土壌を形成し、保水力も高くなり、豊かな水を育んでくれます。そのため、横浜市ではスギやヒノキの人工林（針葉樹）の間伐等を計画的に行い、水源涵養機能などをより高めることができる広葉樹林及び針葉樹と広葉樹が混生する森林（針広混交林）を育成する管理を進めています。

一方、道志村の面積の約6割を占める約4,600haの民有林の中には、人手不足等で管理が行き届かない森林が増えています。そのため、平成16年度から市民ボランティアの力を得て民有林の整備を進める「道志水源林ボランティア事業」を展開し、事業開始以降、延べ約13,000人が参加して、約55haを整備してきました。この活動を支援するため、平成18年度には「水のふるさと道志の森基金」を設置し、市民・企業からの寄付金やペットボトル水「はまっ子どうしThe Water」の売り上げの一部を受け入れ、財政基盤の安定化を図っています。

また、道志村が地域振興に取り組む際に長期にわたる安定した資金援助を行うために、横浜市が10億円、道志村が1,000万円を拠出した「公益信託道志水源基金」を設置しているほか、道志村の生活排水処理事業への助成や、企業や団体等と協働で道志水源林の整備を推進する「水源エコプロジェクト事業」の展開など、市民・企業など様々な担い手の力を活用して森林保全の取組みを充実させています。

これらの取組みについて、横浜に本部を置く「国際熱帯木材機関（ITTO）」が平成26年4月にコスタリカで開催した国際会議で発表する機会を得ました。その結果、市民や企業と協働した多様な取組みによって長期的な水源林保全がなされている点について、「水源地保全の優れた実例」と評価されました。

近年、自然環境と人間活動との共生（環境共生）が求められており、その中においても、森林の持つ公益的機能が見直されて森林の保護・育成は重要視されています。今年は道志村の水源林取得から100年の記念の年になりますが、今後とも健全な水循環を実現していくパートナーとして道志村の方々に感謝しつつ、友好関係をさらに発展させていきたいと考えています。

水源林ボランティア活動の様子

TOPICS

小菅村新庁舎

小菅村役場庁舎の外観

3階 議場兼大会議室

平成27年3月に竣工した小菅村役場新庁舎は、役場執務室のある1FがRC造、会議室や多目的スペースを備えた2・3Fが木造の混構造で建設されました。木造部分は山梨県産材の薄板を貼り合わせた集成材（LVL）と大断面集成材を利用しており、さらに外構には村の面積の1/3を占める東京都水道水源林で育った樹齢100年以上のヒノキがシンボルツリーとして設置するなど、内外装共に木材を多用し、木の香りが漂う庁舎となっています。

また、太陽光発電設備や地中熱を活用した冷暖房など自然エネルギーを活用し、環境にも優しい庁舎となっています。

お近くにお越しの際はぜひご見学ください。

入会のご案内

あなたのその力が豊かな水環境を創ります。

協議会では、さまざまな活動を通じて、水環境の保全・再生に努めています。

桂川・相模川流域協議会に興味をもった方は、是非入会して下さい。

入会手続きは、下記事務局へ問い合わせて下さい。

お詫び

第34号及び第35号に誤りがありましたのでお詫びして訂正します。

第34号

・表紙中　「境橋」→「境川橋」

・P.3中　2行目「境橋」→「境川橋」

第35号

・P.2　上から22行目「パナジウム」→「バナジウム」

・P.5　上段右側写真下段説明「日連大橋」→「勝瀬橋」

・P.13　執筆者名「梶　文」さんの名前が漏れていました。

編集後記

春の芽吹きとともにお届けする36号をお手に取って頂きありがとうございます。初めて会報誌「あじぇんだ113」の編集に参加しました。

今回から誌面のデザインが一新され、読み慣れた連載記事も新たな趣が感じられるのではないでしょうか。

（H.H）

表紙写真／撮影場所：都留市十日市場駅裏から見た蒼竜峡　写真提供：清水絹代／市民会員

本紙に対するご意見・ご感想を下記事務局までお寄せ下さい。

あじぇんだ113　No.36（2016.3発行）

発行　桂川・相模川流域協議会

編集　あじぇんだ113編集委員会

桂川・相模川流域協議会ホームページアドレス　http://katurasagami.net/

事務局　山梨県富士・東部林務環境事務所　〒402-0054 都留市田原3丁目3-3　TEL.0554-45-7811 FAX.0554-45-7807

神奈川県環境農政局 水・緑部 水源環境保全課　〒231-8588 横浜市中区日本大通1　TEL.045-210-4358 FAX.045-210-8855

VEGETABLE OIL INK

■やまなし森の印刷紙
この印刷紙には、FSC®森林管理認証を取得した山梨県有林からの木材が使用されています。

Fontworks UD FONT
ユニバーサルデザイン（UD）の考えに基づいた見やすいデザインの文字を採用しています。